

論文審査の結果の要旨

申請者氏名 奥山洋一郎

森林に求められる役割が、これまでの木材生産から生物多様性の保全、レクリエーション利用、また地球温暖化対策としての二酸化炭素固定源などと多様になってきている中で、森林の教育利用の重要性が高まっている。学校林は森林に親しみ学習する場として、多様な役割への理解を深める場として格好のフィールドである。本論文では、森林教育の場としての学校林が果たす可能性、解決すべき課題について考察した。

第1章では先行研究をレビューし、本研究の目的、方法、構成を述べた。

第2章では森林・林業白書から森林教育の林政上の位置づけをたどり、上述のように森林の教育利用の重要性が高まって来た事を抽出した。

第3章では学校林について全国調査を行い、所在する立地を都市、農村、山村の3地域に分類して比較した。

都市の学校林は、校地から距離が近く、広葉樹や果樹も含めて多様な林相を持つ割合が大きかった。設置目的は、教科教育、環境教育、課外・特別活動と言った教育目的に類するものの割合が比較的大きく、基本財産を目的とするものは他の立地よりも比較的小さい。利用に関しては、他の立地条件に比べて活発であり、利用内容も、教科教育利用の割合の大きさに特徴があった。

山村では、校地から遠隔地の学校林が多く、樹種は針葉樹のみが多かった。設置目的は林業教育が多く、また学校の財産としての利用を目的とした伐採の実施実績も多かった。管理主体では外部の協力主体として、森林組合の多さに特徴があった。利用状況は低調であり、利用頻度も年一回という学校林の割合が6割を超えており、一番大きかった。

農村では、校地からの距離や利用状況を見ると都市と山村の中間的な性格を持つ。樹種を見ると針葉樹のみという学校林の割合は山村と変わらないが、利用は比較的活発であり、農村と山村の地域共同体の現存度が反映していると考えられた。山村では地域の財産であった学校林を維持できない状況が起きており、比較して平地農村の方が地域共同体を維持できており、それが学校林の維持管理にも影響した可能性がある。

これら結果は、立地により必要な協力主体や支援内容に相違があり、農村、山村では森林組合等の既存の森林管理団体や地域共同体との協力、都市部では新しい森林管理団体としての森林ボランティア団体等、新たな森林整備の担い手との連携が必要な事を示唆している。

第4章では都市型の学校林活動の可能性として、市民団体と連携した学校林活動について現地調査を実施し、市民団体との協力の可能性を検討した。

調査事例は活動が5年間継続しており、この活動継続にはノウハウを求める小学校とフィールドを求める市民団体の両者の意志が一致したことが大きい。利用できる森林が近くにあるが活動に踏み出せない学校に対して、本事例から抽出できる要因は以下の三点である。

(1) 行政による情報提供

本事例の立ち上げに当たって学校側の相談に、市役所による適切な協力者の紹介があった。以前のように直接土地を購入して学校林を設置し、作業管理まで行政が責任を持つのは困難な状況であり、このような情報の継続的な収集と提供が行政機関の重要な役割である。

(2) 緩やかな組織形態

自由な形態の「同好会活動」にし、児童らが参加しやすい形態となった。学校側が児童の状況を見て、最適な方法を選択したと言える。

(3) 学校、団体内部での責任の明確化

緩やかな組織形態の一方で、活動の継続には、責任ある体制が不可欠である。学校側は担当教員の転任のたびに新しい担当者を決めており、市民団体側も担当責任者を決めて各回ごとにリーダーを決めて活動を行った。

新しい担い手の参入は伝統的な学校林の管理・利用のありようにも影響を与えて、停滞した学校林活動を再生するきっかけとなることも期待される。市民団体との協力体制を構築することで、学校林活動の課題であった活動の継続性が担保された。また、活動実施に当たっても新しい知識、方法が学外から導入されることで内容の充実が図られた、と評価できるだろう。

第5章では国有林における「悠々の森」制度を取り上げ、学校への国有林の提供を想定して設定された本制度が、学校林としてどの様に利用されているかを調査した。柔軟な制度設計がなされているため、熱心な国有林の現場において活用されている事が明らかとなったが、問題を抱える例も見られ、今後も検証が必要である事が明らかとなった。

以上、本論文は、文献調査による問題設定に、地域に密着したフィールドワークに基いたデータ収集を重ね、森林・林業政策にとっても、文部教育政策にあっても狭間に位置する学校林を森林教育の場としてとらえて利用・管理のあり方を明らかにした意欲的な試みであり、学術上・応用上貢献するところが少なくない。よって審査委員一同は、本論文が博士(農学)の学位論文として価値あるものと認めた。